オーディオ実験室収載

音源の比較試聴(16)
―ドボルザークのチェロ協奏曲―

１． 始めに

前報(15)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

２． 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果を、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のアントン・ドボルザークのチェロ協奏曲を聴いていきます。

アナログ盤

ドイツグラモフォン　MG-2118

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ（チェロ）

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

ANGEL　EAC-81007

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ（チェロ）

カルロ・マリア・ジュリーニ指揮ロンドンフィルハーモニー

WARNER CLASSICS

ジャクリーヌ・デュプレ（チェロ）

ダニエル・バレンボイム指揮シカゴシンフォニーオーケストラ

PHILIPS　27PC-29

ハインリッヒ・シッフ（チェロ）

コリン・ディヴィス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

CD

日本コロンビア　COCO-78038

ミクローシュ・ペレーニ（チェロ）

イヴァン・フィッシャー指揮ブダペスト祝祭管弦楽団

BMG　B20D-39178

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ（チェロ）

小澤征爾指揮ボストン交響楽団

TELDEC　8573-85340-2

ジャクリーヌ・デュプレ（チェロ）

セリヂウ・チェリビダッケ指揮スエーデンラヂオシンフォニーオーケストラ

MQA-CD
ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ（チェロ）
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

３．音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のロストロポーヴィチとカラヤン指揮ベルリンフィルは、1968 年にベリリンの教会での録音で、流麗なベルリンフィルをバックにロストロポーヴィチが、ある時は豪快に、ある時は抒情的に歌いあげていきます。
アナログ盤のロストロポーヴィチとジュリーニ指揮ロンドンフィルハーモニーは、1977 年の録音でジュリーニ指揮ロンドンフィルハーモニーは穏やかでおっとりした演奏で、ロストロポーヴィチも先のカラヤン指揮ベルリンフィルとの演奏より穏やかでしみじみとした抒情性を前に出しています。
アナログ盤のデュプレとバレンボイム指揮シカゴシンフォニーは、1970 年の録音ですが、後にディジタルリマスターされた後にアナログ化されたもののようです。力強いシカゴシンフォニーとともにデュプレが伸び伸びと躍動的に演奏しており、メリハリのついた音となっています。
アナログ盤のシッフとディヴィス指揮アムステルダムコンセルトヘボウは、1980 年の録音で、あっさりしていますが、メリハリのある音で、演奏もそのような印象です。
CD のペレーニとフィッシャー指揮ブダペスト祝祭管弦楽団は、1982 年の録音の廉価盤ですが、ディジタル臭さのない自然な音で、演奏もこれといった特徴はありませんが、中庸を得ています。
CD のロストロポーヴィチと小澤征爾指揮ボストン交響楽団は、1985 年の録音です。ロストロポーヴィチのチェロは、上記アナログ盤 2 枚と同じようによく歌わせていますし、小澤征爾指揮ボストン交響楽団の響きも豊かですが、鮮度感は上記アナログ盤 2 枚より後退します。
CD のデュプレとチェリビダッケ指揮スエーデンラヂオシンフォニーは、1999 年の録音で、録音年代が新しいだけあって、先の 2 枚の CD より音に鮮度感があります。デュプレのチェロは、ダイナミックで勢いがあり、チェリビダッケ指揮スエーデンラヂオシンフォニーも切れのよい演奏です。
MQA-CD のロストロポーヴィチとカラヤン指揮ベルリンフィルは、アナログ盤とマスターが同じと思われます。fidata HFAS1-S10 にリッピングしたものを Brooklyn DAC+経由で再生しましたが、まさしくアナログ盤と同様の演奏で、アナログ盤に劣らない音質です。
ロストロポーヴィチは、アナログ 2 枚、CD1 枚、MQA-CD1 枚を聴きましたが、メディアの違い、収録年代や共演のオーケストラの違いがよく分かりました。

４．まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAV ドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いや収録年代の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上